



「大船渡学」 とは？

ゴールは地元のためではなく、知の創造。 「大船渡のことを学ばない大船渡学」に

地域を学ぶ活動から、生徒が
学ばないことを学ぶ探究へ

大船渡高校の「大船渡学」は、2016年に当時の2学年の学年主任の先生が始めた学習活動だ。プログラム設計と、学校と地域を結ぶコーディネータ役として、NPOの事務局長も務める東北学院大学地域共生推進機構の菊池広人先生が招かれた。しかし、当時は学校全体の取り組みではなく、2年生だけが年間4時間で、地域について学ぶ学習として進められた。

2017年に進路指導担当で世界史の教諭である梨子田 喬先生が大船渡学の担当となる。

「生徒の主体性を育む探究は、地域を知ることがゴールではないと思います。地元のためではなく、生徒の学びたいことを中心とする『大船渡を学ばない大船渡学』として教育課程に組み込み、1・2学年の全生徒と全教員で取り組む授業としてリノベーションしました」(梨子田先生)

そもそも探究とは、学習指導要

領解説で説明されるように「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営み」であり、生徒が主体的に取り組めなければ活動の意味がない。自分から出た問いに対して仮説を立てて、課題解決の主張や提案ができるような大船渡学を梨子田先生は目指し、菊池先生との二人三脚が始まった。

地域は生徒が検証や行動を
起こすためのフィールド

従来の日本の教育では「教員がわかりやすく教える」ことをしてきたため、学びに対する生徒の主体性が育っていないと梨子田先生は課題感をもっていた。加えて、希望進路先への書類提出の際に志望理由書が書けない生徒も多かった。「自分の考えをきちんと語り、自己のキャリア形成を自分でできる」生徒を育成できるように、大船渡学を設計し直すことにした。

リノベーションのポイントは「生徒のやりたいこと、興味のあること」からテーマ設定し、それを大船渡という

地域に結びつけることだ。生徒の興味が中心でありながら、地域と結びつける理由は、生み出す知を地域の役に立てることが主目的ではなく、仮説の検証で実際に現場に行つて見聞きしたり、課題解決のためのアクションを社会の中で実践させるためだ。1学年ではチームで活動し、2学年では個人で改めて問いを再設定して探究し、一緒に学びたい研究者を調べ、その研究分野の2030年の状況を考える。

右ページの手書きの文字は、1年生での探究活動を経た生徒たちが、2年生の初めに大船渡学についての感想を書いたものだ。前向きな感想もあれば、めんどろ、やりたくない、不安という声もある。そうした生徒たちに対し、先生たちはどう向き合っているのだろうか。次ページから、リノベーションした大船渡学の設計、そこから見えてきた課題、梨子田先生、菊池先生たちが探究自体を探究してきた1年間の活動についてレポートする。



左／梨子田 喬先生
(進路指導・2学年担当)、
右／菊池広人先生
(東北学院大学地域共生推進機構 特任准教授)

大船渡高校(岩手・県立)

学校 data : 1949年創立／普通科／生徒数531人(男子235人・女子296人)／進路状況(2017年度実績)大学166人、短大6人、専修その他20人、就職1人、その他5人

多くの生徒が4年制の大学に進学。部活動も盛んだ。大船渡市は岩手県の南東部の沿岸に位置し、中心部が東日本大震災で津波による甚大な被害を受け、多くの地域課題を抱えている。

※大船渡高校の取り組みは小誌419号でも紹介しています。



生徒自身のやりたいことからスタート。 興味・関心をどうテーマに落とし込むか

生徒自身から湧き出る問いを立ててこそ主体的学び

探究の出発点であり、核となるのが「問いの設定」だ。

「従来の授業では、発問をしている主体は教員で、生徒は教員の発問を考えさせられている客体にすぎませんでした。『主体的学び』という言葉が『積極的』『意欲的』程度の意味で捉えられている気がします。生徒が自ら問いを立ててこそ学びの主体となる、これが主体的学びの本当の意味だと思います」(梨子田先生)

まず、生徒が自身の興味に気づき、学びたいことを深めるためのマッピングから始める(図3)。

学びたいことを文章で書かせると、生徒たちは無意識のうちに教員の顔色をうかがってきれいな文章にまとめようとし、自分のやりたいことから離れていく。そうならないよう、単語で興味のキーワードをたくさん書き、関連性をつないでいく。次に、地域課題と自分の学びを結びつけるために、地域を中心において学びたいことを周りに書き、その間をつなぐものをマッピングしていく。

「マッピングのワードから探究テーマ(問い)を考えやすいように、ワークシートを用意していますが(図4)、ワークシートをきれいに埋めて書くことは求めています」(菊池先生)

テーマに落とし込む段階では、「課題」とは何かを生徒に意識させている(図1)。「課題」は「問題」とは異なり、目指すべき未来と現状とのギャップのことだ。現状を把握し、課題を探してその解決策を見つけることが、大船渡学で実行することと明確に生徒に伝えている。

また、仮説検証のために地域に出る際、問いが明確でなければ的確な情報収集やアクションができない。生徒の地域参画の段階を表した「ロジャー・ハートの参画のはしご」(図2)の上部を目指し、「活動ありて学びなし」にならないためにも、生徒主体で問いを立てることが重要なのだ。

教員との対話と、生徒自らの振り返りで問いを磨く

立てた問いが新しい知を生み出す活動につながるか、問いを磨くことも必要だ。その主体も生徒自身で、教員は指導者ではなく伴走者だ。問い磨き

のために大船渡学では「教員との対話」と「自分への質問」を行っている。

「教員との対話」では、生徒の内発的な動機を探す助けとなるような言葉かけをする。その際の目安となるルーブリックを作成している(図5)。この声かけ例によって、生徒たちは自分ごとであればあるほど、自ら探究の質を高めていくという。

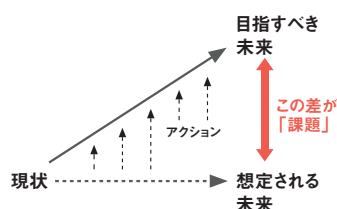
「自分への質問」では、一旦作成した問いやアクションプランに対し、自ら20個の質問を出す。

「些末な内容でもよく、20個ほど書かせると『そもそも何でこれをやるのか?』など意外な本音が現れて、問い磨きに役立ちます」(菊池先生)

こうして磨いた問いに対し、各々がフィールドワークで情報収集して仮説を検証。その結果から問いを再検討した後に、実際のアクションプランを練りアクションに移す。フィールドワークもアクションも基本はすべて生徒が外部にアポイントを取り行動する。最後に1年の活動をポスターにまとめた発表会を実施。

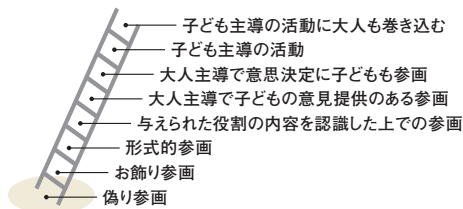
こうした一連の取り組みで、生徒にとって自分ごとである探究活動ができたはずだった。

図1 「課題」とは?



生徒たちが取り組むテーマを考える際、「課題」とは何かを理解させるために用いている図。「問題」とは今ある困りごとで、「課題」は目指すべき未来をイメージしたうえでの現状とのギャップのことだ。

図2 ロジャー・ハート「参画のはしご」



ニューヨーク市立大学教授のロジャー・ハートが「子どもの参画」の中で提唱している、子どもの学習活動や地域活動での参画の度合いとその意義を示す図。上にいくほど主体的に参画していることになる。



1年生の大船渡学の前半に使用するワークシート。取り組んでみたいことについて、現状、目指すべき未来、自分たちにできることと、図1の「課題とは何か?」の視点から問いを立てていく。



生徒が教員を忖度せず、本音で自分の考えをきちんと語れるように

興味・関心から始まったはずが
やりたいことから離れていく

昨年の1年間での大船渡学では、問いの設定で悩む生徒、アクションに移すことを怖がった生徒、途中でテーマを変える生徒など、それぞれに苦勞しながら課題解決に当たっていた。外部のコンテストで受賞する生徒も出るなど、探究によって確かな成長を遂げた生徒もいた。

ところが、2年目の冒頭に行った外部講師を招いての講演で、生徒たちに昨年の感想を書いてもらおうと、「やりたいことができなかった」という意外な声が少なからず出てきた(図7)。

「生徒たちにはこれでもかというほど『やりたいことをやろう』と言ってきました。それなのにやりたいことができていない生徒がいた。そのことに生徒自身も我々教員も気付かず、目が覚めました」(梨子田先生)

実践内容がやりたいこととずれてしまったのは、生徒のマインドセットが「先生の要求に応えること」になっているからだ。これまでも生徒の本音を引き出してきただった。

「教員への忖度は生徒自身も無意識の行動です。探究は予定調和ではなく、本当に自分が深めたいことに向

かつて、生徒自身がハンドルを握って進めるのが理想です。私も含め、期日や成果物の完成度を重視してきた教員のマインドセットが生徒に影響を与えています。マインドセットを変えなければ、生徒は自由に行動できなかったのです」(梨子田先生)

生徒が自身の本音から
ぶれない仕掛けづくりが必要

生徒のマインドセットが変わっていないことに気付かなかったのは、本音での振り返りが足りなかったためと梨子田先生たちは考えている。本音を引き出す施策は今までもやってきたことだが、今後はさらに強化したいという。

「フォーマットを作ると生徒たちは『なんとか埋めなければ』と忖度行動に走ります。だから白紙に水性マーカーで書いてもらいます。好きな色の水性マーカーでお絵かき感覚でざっ



梨子田 喬先生

(進路指導・2学年担当)

「自分自身、昔は生徒にアドバイスすることが仕事だと思って、一生懸命アドバイスしていた」と梨子田先生。アドバイスを指示と捉えた瞬間に、生徒にとって「やりたいこと」が「やらねばならないこと」に変わってしまうという。「教科でアクティブラーニング型授業を実践し、教室の後ろから生徒たちを見たときに、生徒たちの学びのスタイルが多様であることや、一律の授業で生徒の考える時間を奪っていたことに気がきました」

くりと書くことで本音が出やすくなります。また、あまり時間を与えず、時間内に終わらなくても、その場で書き終えてもらいます。持ち帰って書くことと教員の顔色を思い浮かべて整えてくるからです」(菊池先生)

ワークシート類だけでなく、授業の建て付けもフリースタイルにすることで、生徒の本音を引き出すことに役立つという。

「自分が本気で学びたい問いを立てることができれば、あとは条件とゴールを示して時間を生徒たちに預け、友人同士の自由なコミュニケーションをしてもらおうと、本音の議論に発展していきます」(梨子田先生)

探究の大前提は、学校活動の
すべてが生徒主体であること

生徒の主體的な学びでは教員は伴走者だ。伴走者とは具体的にどうあるべきなのだろうか。

図7 やりたいことができなかった生徒の声

◎最初から地域に貢献することを考えると自分のやりたいことと、2年目の自分のやりたいことから、地域に結びつけていけば、意味のある大船渡学になると思う。

アクションと気にしすぎて
自分の好きなようにできなかった。

私の部下大船渡も大船渡ではない所も学んでない気がする...
今思っていることは、
ていほうなんてしらべなきゃならぬ。



今年の大船渡学の冒頭で行った外部講師による講演会。そこで生徒が書いた感想には、梨子田先生たちの予想と異なる声があがった。



図8 梨子田先生が「したくない」探究と、理想の探究の姿

したくない探究		理想の探究
文部科学省がやれというからやっている。成果を出した学校がやっているからやる。 目的がない。	1	主体的な学び (意欲的という意味ではなく、学びのハンドルを握り続けやり遂げる)ができる生徒を育てる。
問いは 先生が与えてしまう。	2	問いは、 学習者本人が考える。
ネットで調べたら解決する 浅い問い 、そして 収束解。	3	世の中で誰もが模索する 深い問い 、そして 無限の答え。
先生の指導がガンガン入り、誰がやっているんだかわからない。 主体なき探究。	4	先生の役割は 指導ではなく支援 。後ろからついていく。問いかけ。「すごいね」という承認。迷ったら「進めばわかるよ」と背中を押す。
目的なきフィールド調査。 それ自体が目的化 。フィールド調査をするために探究をする??	5	仮説を検証し新しい問いを生み出すためのフィールド調査。 生徒がハンドルを握って 仮説検証プロセスを転がしていく。
ポスターの制作時間がたくさん。 年間計画の半分くらいが成果物 づくり。	6	ポスターの制作時間よりも 問いを磨き育てる時間 を多く。
なのに、最後に製本して報告書。 そこは立派。	7	報告書もいいが、それより 生徒自身の言葉で語らせる場。

図9 生徒の探究が劣化しないよう、梨子田先生が実施した生徒との対話

図7で「ていばうなんてしらべなきゃよかった」と書いた生徒(地域の防災システムがテーマ)で、今年は核融合をテーマにしている生徒に、梨子田先生が声をかけ、さらなる本音や対話をしたい気持ちを吐露してきた例。

先生: 今は本当に面白いことをやっている?

生徒: 好きなことをやろうと思って核融合反応をやったけど、これも「探究」って感じで始めると、面白くなる。なぜだか自分でもわからない。「アレクサンドロスが西へ行ったら」をやったら1年間続けられる自信がある。答えがないですからね。

先生: 堤防だって答えがないんじゃない?

生徒: あ、そうですね。堤防のときは、宿題みたいになっていた。専門性が高すぎて自由に考える余地がない。アレクサンドロスの場合は、ローマ人と本気で戦ったら真剣に考えたんですよ。マケドニアのファランクス…(以下、自分の考えを楽しそうに延々と語る)

先生: そっちだって専門性高いじゃん。

生徒: あー聞いてくれる人がいるからですかね。人に聞いてもらってフィードバックが返ってくると面白い。対話がしたい。わかっている人で、しかも対等であってほしい。正解ではないけど、その人らしい答えが返ってくるから。だからですかね。面白くなるってことは対話がなくなるからではないですかね。それはありますね。

菊池広人先生

(東北学院大学地域共生推進機構 特任准教授)

水性マーカーを常時数百本持ち歩いているという。「探究は答えが一つではない学びです。仮説は立てつつ、結果から逆算しないことが大事。見通しがないところを一つひとつ掘っていくと、掘れば掘るほど深くなっていきます。探究は面倒ですが、好きなことなら生徒たちは進んでやります」。そして新しい価値を生み出せたときに自己実現が可能になる。生徒には「探究の意義は自己実現」と毎回伝えている。



「生徒にアドバイスしないことです。アドバイスのつもりでも、生徒たちは指示と受け取ってしまいます。私自身もついアドバイスして『しまった!』と思うことがあります。生徒の話を最後まで聴き、『すごいな』と感心したり、こちらからは指示にならないように疑問文で話すようにしています。『本当にこれでいいの?』と聞くと、『いや実は…』と別の本音が出てきたりします。生徒が手詰まりになっているときは『〇〇に聞き

にいつてみれば?』と外で調べるよう促します」(梨子田先生)
実際に梨子田先生が、悩んでいる生徒の探究が劣化しないよう、声かけした対話の例が図9だ。
もつとも、大事な問いを立てる力は大船渡学だけで身に付けられるものではない。
「世界史の授業でも、生徒が自ら問いを立てる手法を組み込んでいきます」と成績にかかわらず、問いのヒットメーカーとなる生徒が現れ、後に

急成長を遂げていきます。だからアクティブラーニング型授業が必要なのだと思います」(梨子田先生)
探究で問いを立てられない生徒がいるのは、教育活動の大半を占める教科授業の中で、こうした力を身に付ける機会を与えていなかったからだ。探究は「横断的・総合的」な学習だ。教科、行事、部活動など学校活動のすべてで、生徒の主体性や思考力を育む取り組みの必要性を梨子田先生は感じている。



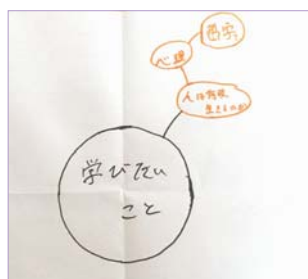


学びの主導権を生徒に返せば 生徒は自ずと走り出す

探究は魔法のツールではない
学びの姿勢を育てるレッスン

梨子田先生たちにとって改善点も見つかった昨年の取り組みだが、多くの生徒は自分のやりたいことから問いを導き出している。その結果が必ずしも本人の満足がいくものでなかったとしても、**図10**のコメントや15ページの座談会のように、生徒たちは自分の変化や成長を実感している。

一方で、最後までやりたいことを見つけられなかった生徒もいた。最初のテーマ探しのマッピングでは「学びたいこと」から長い時間をかけて「人はなぜ生きるのか」「心理」「哲学？」とつながったところでストップ。しかしその後もその生徒は、現在も探究したいことを探すために思考し続け、「大船渡学は自分がやりたいことを考える手が必要だった」と答えている。もともと多くを語ら



「学びたいこと」で止まってしまった生徒のマッピング。それでも大船渡学は自分について考えるきっかけとなったと語っている。

ない生徒だったが、動画サイトを使って知らない人の意見を聞こうと行動したり、自分から話すようになるなど、本人以上に担任の先生が変化を感じているようだ。

「探究は学びの主導権を生徒に返すことです。授業の冒頭の10分くらいでその日の工程を説明して、あとは生徒にバトンを渡すと生徒たちは勝手に自走し始めます。しかし、探究に取り組んだからといって、生徒たちは急には変わりません。学校活動全体にPBL(問題解決型学習)を取り入れたり、外部のPBLプログラムなどに生徒を参加させるなど、複合的な取り組みが必要です。例えば大船渡市では質の高いビジネスプランワークショップを実施しており、それに参加した生徒が知見を持ち帰って周りにいい影響を与えてくれてます」(梨子田先生)

探究は生徒を変える魔法のツールではない。それでも生徒たちに「ハンドルを握っているのはあなたたち自身だ」と伝え続けることで、壁にぶつかりながら、何かをつかもうと動き始める。先生たちは試行錯誤し、生徒たちは振り返りを重ねて自分の本音と向き合いながら探究を続ける。進化していく大船渡学の今後にも期待したい。

図10 大船渡学でついた力と、さらに身に付けたい力



- ・興味・関心を心から持つもの
をテーマにする。
- ・得られた学びを「知識」ではなく
自分を構成する一部分にする。
- ・結果の先を考える。
- ・自分が学んだことを人に伝える
ように話す。
- ・時間や限界を深く考えずに
思ったことは実行してみる。
- ・頭で考えることを口に出して
理解を深める。

- ・コピーではなく新しいもの
として考え作る力
(それが必ずしも必要である
かはわからない)

* 自分について力 *

- ・問題点に気づく力
- ・行動の方法を考える力
- ・まとめる力

- ・積極的に行動を起こす力がついた。
- ・語彙力がついた。

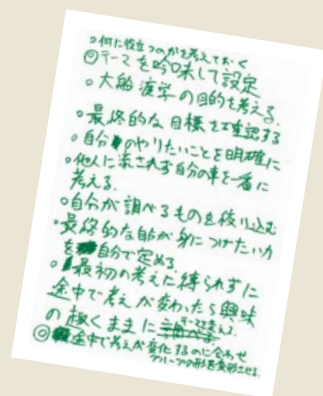
- ・顔が見えない「電話」という
手段を使って、相手に物事を
説明する力が身についた。

大船渡学を通して得た能力は、人とコミュニケーションする力。今までは先生との対話で「はい」「いいえ」など單調なものが中心であったが、大船渡学を通してからはちゃんと文章で返せるようになり、本当の「会話」になった。



大船渡学の感想座談会

人それぞれで異なる自分の価値を見つけていけるのが「大船渡学」



— 大船渡学をやる前と後で、授業のイメージは変わりましたか？

船野さん：最初は地元の課題を解決することを求められているんだろうなと思っていましたが、自分たちにどういう力を付けるか自己実現が大事なんだと気がきました。地域のためじゃなくて、自分の目標を達成するために、プロセスを磨くためのものだったんだな、と。

鈴木さん：自分はガイダンスで目的も理解していたつもりでした。ITやAIに興味があって、「AIがつくる多様化した社会」という課題を立てていざ調査していったら、予想と違うことが次々に起きて。介護ロボットが解決策になると思っていたら、意外と介護現場ではロボット自体の課題が多くて、それは高校生の自分には解決できない問題だと。介護現場とロボット会社をつないでだけで、自分は結果にコミットできず悔しかったです。

村上さん：鈴木くんがそんなことまで考えてたなんて知らなかった。私は最初はイヤでしたが、成果が出てくるとだんだん楽しくなりました。

山下さん：村上さん最初やる気なかったよね(笑)。200人分のポスターセッションを1時間で回することはできないから、もっとみんなが、どんなことで充実できたり悩んで課題に取り組んでたのか知りたかった。

— 辛かったり悔しい思いもあったようですが、大船渡学は楽しかったですか？

全員：楽しかった！

山下さん：純粋に経営戦略に興味があったので、好きなことをやっていた感じです。僕は、大船渡市のビジネスプランコンテストに参加していたので、それと合体させてやっていました。

鈴木さん：僕は中学のときに自分が色盲だとわかって、障がいは個性だと教えられたんです。でも標準化された大量生産の社会では障がい者には不便が多い。情報工学に興味があって調べていくと、ITの力で小ロットのダイバーシティ生産や個性を活かした世の中が実現できると知って、それをテーマにできて深めていけるのが大船渡学でした。専門家の教授とアイデアのやりとりをすることが楽しかったです。

— 自分のテーマの話になるとイキイキしますね。そういう話を友達とはする？

鈴木さん：しません(笑)。同じことに興味がある人と同じ立場でないと話づらい。

山下さん：でも他の子が考えてることも知りたいよね。1年のときのグループでは、自分はやりたいテーマだったのでいろいろアイデア出したりしましたが、やる気のある人となない人の温度差が結構ありました。やる気の出ない人は、何をやりたいか興味の対象がぼんやりしてたり、大きすぎる人が多かったかも。

村上さん：自分は好きなことがあったわけではなくて、現代社会の授業で「終末医療」という言葉を聞いてやってみようかな、ぐらい。でも調べていくなかで孤独死の本来の定義を知って、高齢者を孤独にさせないイベントをやろうとしたときに、いつどのようにやれば、いろんな人が参加できるかを考えたりしているうちに楽しくなってきた。他のメンバーが面倒くさかったので、仕方なく引張ってるうちに自分の新しい一面を発見したりしました。

船野さん：私は三者面談のときに、梨子田先生が「好きなことは何？」と聞いてくれて。それまで

考えたことなかったけれど、家族や生活のことを突っ込んで聞かれて、自分は化学が好きだと気付きました。勉強は嫌いだけど実験が好き。それで自宅の地下水と柿を利用してニアウォーターを作る実験をテーマにしたら、外部で行っている課題研究アワードで大きな賞を受賞できました。人前で話すのは苦手でしたが、審査のときにたくさん褒めてもらって自信になりました。

村上さん：船野の受賞は刺激になったよね。

— 大船渡学は皆さんにとって何だと思いますか？

鈴木さん：新しい価値を生み出す体験で、自分に新しい価値を付けて高めるもの。自分はITから入って、介護についても深く知り、教科では学べない専門知識が付けられました。

船野さん：好きなことを極められること。好きだからこそ突き進めます。人それぞれ自分でやり方をカスタムできる学びです。

山下さん：専門知識をもった大人と話せる機会。新しい情報や知識を大量に得ることができて、自分のまちがいを正せる機会。自分の好きなことを地域課題に結びつけてアクションを起こすから、一人ひとり全然違う課題ややり方が出てくるのが面白いです。また、所属している美術部でやっていることとすごく被ります。作品を創る前に背景知識を考えて試行錯誤するのと似ていて、両方「デザイン」なんだと。

村上さん：得られる価値も人それぞれですが、私はコミュニケーションの手段が増えて、自分の得たいことが得やすくなり、どこに行くかわからない楽しさもありました。積極的になれて、殻を破って今までとは違う自分を育てることができました。



山下森人さん

- ① 大船渡の諸課題をビジネスの観点から解決する方法
※山下さんは大船渡市のビジネスプランワークショップに参加
- ② 地域活性化のための海外事例を踏まえた取り組みと町の再編による地域再生

村上陽菜さん

- ① 大船渡の孤独死の現状を把握し、孤独死を防ぐ対策について
- ② 地域包括ケア

生徒プロフィール

- ① …1年生のときに取り組んだ内容
- ② …2年生での探究テーマ

船野杏友さん

- ① 大船渡の鳥獣被害と水資源の未活用を解決するためのニアウォーターの開発
※船野さんはこの研究でNPOカタリバが主催するマイプロジェクトアワードで文部科学大臣賞(大賞)を受賞。
- ② 柿の栄養価を活かした食品製作



鈴木 蒼さん

- ① 大船渡の介護の現状を把握し、介護士と高齢者の密接なコミュニケーションが取れているかについて
- ② ITがつくる新しい社会

